



## 関西 ECOMAIL

関西の学会員のみなさまに、ワークショップのお知らせと環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションも広く図りたいと思います。

年間1000円の通信費をいただきましたら、ワークショップの案内とECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振込先：日本環境教育学会関西支部)

郵便振替口座番号 00990-5-37886)

## 第34回 関西ワークショップのお知らせ

日時：1994年6月18日(土) 午後2:30~5:00

話題提供：

「水の浄化と地球環境：水＝生命の源」

田中孝典さん 「メダカの学校大阪」グループ

「地球上最高のエネルギー資源として、淑やかで奇麗な情熱を無尽蔵に秘めているのもまた水なり。」 (水五則より)

マイクロ波集積回路の開発に取り組む電子工学技術者が、水という生命の根源を量子構造論と宗教哲学から追究する。

いま、次の世界に向けて、誰が生徒か先生か、若い人たちの「共育」による知恵の輪づくりが始まっている。

会場：大阪教育大学(天王寺キャンパス)

(JR環状線寺田町駅下車 西へ徒歩3分、または天王寺駅下車 北東へ徒歩7分)

問い合わせ先：大阪教育大学環境科学教育研究室 (☎ 0729-76-3211 [内線 3127])

## 「UNEP施設」と「さくやこの花館」見学

フィールド・ワークショップ大阪コースの下見をして

天野 雅夫 (甲南大学)

日本環境教育学会は、平成6年5月14日～15日の間、神戸の甲南大学で第5回大会を開催する。今回の関西支部ワークショップは、その大会前日に行われるフィールド・ワークショップという企画の下見をかねたのものであった。第5回大会のフィールド・ワークショップは、神戸、大阪、京都、奈良の四カ所で行われるが、その大阪コースとして鶴見緑地公園内“さくやこの花館”と“ユネップ国際環境技術センター”の見学および研修が企画されているらしい。どのコースも非常に興味深い内容で、同時に行われるためすべてに参加できないのが本当に残念である。ここではそのうちの大阪コースの、ほんの一端であるが実際に訪れて感じたことを述べてみたい。

JR大阪駅から環状線を使って京橋駅まで行き、その駅を出てビルの谷間を5分ほど歩いたところに地下鉄鶴見緑地線の改札口がある。さらに景色のない地下鉄の車内で数分間を過ごすと同点鶴見緑地駅に到着する。この駅は四年前に開催された「国際花と緑の博覧会」へのアクセスのために建造されたものであるが、今では当時の華やかさを想像できないほどにひっそりとたたずんでいる。人工的な駅舎を通り、階段をのぼり地上にでると、二本の広い道路が地下の鉄道にそって作られていた。そして、ほとんどビルも建っていない巨大な空間が眼前に広がっていた。大阪の中心地から電車で30分もかからぬ場所に、このようなほとんど手付かずの広大な土地が残っているということは驚きであった。

私たちが最初に訪れたのは公園内にある“さくやこの花館”である。ここでは、ヒートポンプシステムという非常に効率のよい熱交換機が、八つの気候を人工的に造り出していた。この技術は、下水処理場から毎日大量に送出される処理水を利用しており、環境問題を積極的に配慮して考案されたものである。これが実際に都市で応用されるようになれば、現在の環境問題、特にエネルギー問題に対する一種の解答にもなるのではないかと思われた。また、このような表から見えない技術に支えられて、館内には世界各地の美しい花や珍しい木々がところせましと植えられていた。赤、黄、白と濃い原色で目を楽しませてくれるラン科の植物。

キーウイ、パパイヤといった熱帯の果樹はそのまま食べられそうであった。そして、華やかではないが最も繊細で美しく思えたのは、厳しい気候条件にもかかわらず大地にしっかりと根を下ろして咲く高山植物の花々であった。また、頭に花の冠を付けたサボテンたちは、本当にかわいらしい姿で私たちの心を和ませてくれた。

次に訪れたのは、ユネップ（国連環境計画）国際環境技術センターの建物である。ここは、「世界の環境問題に関する活動の調整と促進を任務とする国連機関」であり、「日本など先進国が培ってきた技術やノウハウを活かし、開発途上国の調和のとれた発展と環境保全を支援するための国際的な活動拠点」である（「UNEP国際環境技術センター施設案内」より）。この建物は①外部型アトリウムのパッシブ空間、②先端技術によるアクティブ空間、そして③内部型アトリウムをもった空間の三つのゾーンから成り立っている。それぞれの機能は、①は日本の自然・風土を生かした空間、②は先端技術を駆使した人工空間、そして③は両者の中間的考え方で設計された空間である。これらは、自然と人とが共生するこれからのアメニティーを提案しているとのことであった。

残念ながら私たちがここを訪れたとき、この施設はまだ機能していなかったが、隣接した観地球環境センターでは、青年海外協力隊などの研修やセミナーが行われているようであった。第5回大会のフィールド・ワークショップのときには実際に機能しているセンターも見学できることであろう。

以上のように、今回の関西支部ワークショップは充実した内容で行われた。環境教育を考える上で重要となってくるのは、環境ひいては自然に対する「素直」な眼差しであり、「謙虚」な気持ちであろう。ところが私たちが自然に対してとってきた態度は、これとはまったく逆の「支配」というものであった。そのような支配の歴史は、そのまま公害問題、環境問題の歴史でもある。従ってこれら諸問題を国際的な立場から研究している機関の見学あるいは研修が、またそれによって喚起される環境問題に対する関心が、環境教育という形をとって市民の間に根を下ろすときが来ることを願ってやまない。そして、このような環境教育によって、子どもたちが生き生きと学べるような教育環境を作っていくことが、今後、私たちに与えられた課題なのではないだろうか。





第32回ワークショップから  
(写真提供 天野雅夫さん)



# 「UNEP施設」と「さくやこの花館」見学

プレフィールドワークショップを終えて

福島 古（企画担当）

先ずもって3月の寒い風の吹く中、参加して頂いた20余名の皆さんに感謝致します。大阪コース設定の意義を、NGOとUNEPの果たす役割と国際交流、施設が持つエコシステムの見学に置きました。これは、企画担当として次のようなことをねらいとしているからです。

93年10月国連施設がはじめて大阪の地に誕生したこと。このことは、日本のNGOにとっても大きな意味を持つことになる——即ち、アジアと欧米、UNEP本部との環としての位置づけです。詳しくは当日配付された資料に譲るが、UNEP本部のもとに、UNEP IETC（国際環境技術センター）の大阪事務所と滋賀事務所を置いている。更に、その支援財団法人組織としてGEC（地球環境センター）とILEC（国際湖沼環境委員会）を設置していることです。

UNEPセンター大阪は、大都市の総合的な環境管理を取扱うことになっています。事業内容としては、以下のようなものが含まれます。

①情報の収集と提供や図書室の開設、②環境モニタリング、アセスメント、トレーニングなどの研修、③コンサルティング・サービス、④研究、⑤広報

ところが、これらの事業を進めるにあたっては様々な困難が予想されます。つまり、資金、人材や情報等の提供が必要だと言うことです。国、大阪府や大阪市、企業や団体、個人からのです。そのためには、その支援財団法人組織としてGEC（地球環境センター）の存在は不可欠でしょう。企画担当としては当日の説明会で、5月のフィールドワークショップの際に、UNEPセンター大阪のスタッフとの国際交流の可能性を打診した所、OKの内諾を得ています。これは、支援財団法人組織の役割に「国内関係組織・機関とUNEPセンター大阪との提携窓口となる」ことがあるのですから、今後、関西支部のワークショップをここで開催するなどしていければいいのではないのでしょうか。

ともかく、GEC（地球環境センター）を核として、UNEPセンター大阪と日本環境教育学会との良き関係の生まれることを、大いに期待しています。

そのことが、環境教育の役割の拡張と言う目的に対して、現実的且つ行動的に繋がって行くことになるのではないのでしょうか。

私たちがいきいき生きるというのは、自己決定権とそれを可能にする選択の可能性を持つことである。その意味でこれまでにない広い可能性を持つようになったが、依然として現実の選択は狭く、同時に自分の意思を超えて自分だけでなく胎児にすら生命や人生に直接大きな影響を受けることを逃れられない厳しい時代にいる。環境と開発について女性の地球環境問題の位置づけを考えてみよう。

1992年の国連環境開発会議では、リオ宣言やアジェンダ21に「主たるグループの役割の強化」や、NGOのグローバルフォーラムの各NGO条約にも女性の視点からの意見や提案が入れ込まれ、またNGO女性の条約として成立させた。その原動力となったのはブラネット・フェミアである。フォーラム会場のウイメンズ・テントは最も大きい会場で女性だけでなく男性の姿も多い。ところが日本からは男女ともほとんど姿が見られなかったのはなぜか！ 実はそこが問題だ。

女性と環境と開発をめぐるさまざまな問題は、次の3つに焦点が絞れる。まず発展途上国の人口爆発は環境と開発の枠組みの中で起きていて、女性の社会経済的状態の改善で解決に向かう問題で、それはわずか20%の先進工業国の人たちが地球資源の80%を消費していることと関係している。産む産まないという生殖と健康に関わる選択は女性の基本的な人権である。次に男女の伝統的役割分業により、家事労働や自給農業、育児、高齢者の介護、地域活動などが市場経済に組み込まれていないために、コストとして計上されていない。これは低価格による大量生産、大量消費、大量廃棄につながる経済システムを可能にしている。第三に、環境や開発は、女性や子供、少数民族や先住民に特に影響を及ぼすので、毎日の生活や地域、国、世界の各レベルで、女性の体験と知識を活かして政策に参加させることである。

NGO条約の草案の段階では、分野の横断的問題として「女性と人口に関する条約」として、人口政策が女性にとって基本をなす問題と捉えられているからである。「再生産(生殖)の健康と選択は基本的人権であり、夫婦(男女)間の私事に属する」、つまり妊娠・出産を女性自身の意思決定によらず政治的にコントロールされるのは基本的人権の侵害である。例えば、途上国では少子政策で十分な医療もなく中絶を強要されて生命が危機にひんしたり、反対に経済先進国では出生率の低下で中絶を否定される傾向にある。地球全体の資源の集中と消費は、最貧の途上国では女性と子どもの飢餓問題として、物が有り余る経済先進国の日本では女性を悩ます深刻なゴミ問題として現れる。現象は正反対だが、表裏一体をなしている。

女性と開発と環境の問題は、急に浮上してきたものではない。第二次大戦後、悲惨の反省から、国連社会経済委員会の中に女性の地位委員会が設けられ、1975年のメキシコでの「国際婦人年」と国連婦人の10年で、「平等・発展・平和」を目標にした一連の流れの中にある。地球の人口の2分の1を占め、10分の1を生産しているにも関わらず、100分の1しか配分されていない、という男女間の生産と配分の是正や、経済先進国と途上国の是正と、また生産性優位の価値観とそれに基づく男女の役割構造を変えることにその根幹がある。

環境教育は、「女性のアクション・アジェンダ21」の11項情報と教育に入れ込まれている。生態学が気や水や生物など物質循環全体の科学的な教育、消費者教育は個人の日常生活を見直す生活行動的な教育だと考えれば、環境教育は人権や文化の多様性、安全性をどのように求めるかという社会的な教育にも位置づけられていると考えられる。そして「すべての生命系の調和と民族間の連帯の促進を目的」として、新しい価値観や世界を希求する倫理や哲学の形成と社会的公正への関係性の再編をも、環境教育は意味しているのである。識字や義務教育への参加は言うまでもない。途上国では女性の職業教育と環境教育と生活向上を兼ねている国がある。

しかし何より「健全で持続的な環境は、世界平和と軍事支配の終了にかかっている・・・」平和なくして文化や伝統を持ったせいかつや自然の多様な遺産は守られない。それだけではない。核の廃棄物の投棄や発ガン物質は女性の体だけでなく、流産や異常出産として次世代の人間である体内の子どもにも影響を受けるのである。

さて、日本では地球環境問題に女性は高い関心を示してきた。しかし地球サミットではなぜ関心が薄かったのだろうか。まず開発による大きな環境の変化がある途上国や、戦争による環境汚染や破壊がある国と違って、日本の女性は直接に身の危機を感じる事があまりない。性的自立については出産の選択は女性が決めているケースが多く、またバースコントロールがしやすい。他国に比べ経済的に裕福で家計を任されている妻が多く、豊かである。環境の個別問題についてはよく認識されているが経済構造を含めた全体の関連図が見えにくい。女性の家庭や地域で担っている役割が男女ともに労働として認識されていない、等が考えられる。そして何より日本の男性の多くは、家庭や地域での生活時間がなく、生産性・効率性第一主義の職場にあって自分自身の日常生活を考えられないところに、問題がある。

グループや地域の団体でも学習がされ、ゴミ問題や水質、食の安全性など学習テーマが多く見られた。その結果、地域ではゴミの分別や牛乳の紙パック、空かんの回収を実行している地域が増えた。しかしでは誰が実行しているのかを見れば婦人会、子供会、老人会、障害者団体、がほとんどである。いわゆる先に述べた社会的弱者といわれる人だけが担っている。女性、子供、老人のしていることは一般の市場経済とは別の世界であり、“タダの労働”と考えられている。生産の段階や環境保持のコストに女性労働が計上されていないだけでなく、廃棄物の処理や環境負荷の軽減など廃棄の段階でもコストにあがってこない。これは日本では特に男性は経済責任を負う仕事、女性は家庭責任を負う無償の仕事という、性別役割分業の仕分けの構図なかで典型的に現れ、また地球環境問題をわい小化されて位置づけられてしまっているからである。そのことにより、かえって、性の差別にもとづく社会経済の構造からの地球環境問題が見えにくいものとなっている。いよいよ毎日の生活の中で始められた地球環境問題への高い関心とささやかな家庭や地域の活動が、次のステップにさしかかった。

地球環境問題は、さなざまな面での関係性の再編ともいえるが、男性と女性の間関係性はじめ、人間と人間の間関係性を変えていくこと、ライフスタイルを変えていくことにつながる。それは自分自身と日常生活を変えていくことになる。そのなかでそれぞれの可能性を生きられることにつながるだろう。



# ECOLO人 ECOLO人 ECOLO人

## 未来の子供たちのためにできること



日本リサイクル運動市民の会 神戸事務所  
事務局長 藤巻 啓二

私の所属している日本リサイクル運動市民の会が、神戸で産声をあげてから18年が過ぎようとしています。

私たちの運動は常に「わかりやすく具体的で、だれでも参加でき、共感を持てるシステムと場」をつくる提案型を心掛け、「リサイクル事業」「安全な食＝らでいっしゅぼーや事業」「エコロジー事業」の三本柱で展開しています。

昨年、再び活動の原点を確認し、さらなる飛躍を期すべく神戸事務局を開設して、早1年が過ぎようとしています。神戸事務局の主な活動は、

- ①発祥の地、神戸でのリサイクル活動の再開
- ②らでいっしゅぼーやWEST活動の拡大
- ③新規事業・環境教育への基盤作り＝地球スクールin神戸の運営
- ④日本リサイクル市民の会・3番目の情報センターを関西（神戸）に開設
- ⑤地域事業所として新しい在り方を模索する、等の役割を持っています。

私事で恐縮ですが、約3週間前の4月19日に娘が生まれました。

妻のお腹の中に新しい生命が宿ったと知った時、神戸という地域で活動をしながら感じた事は、「生活と切り離して語れない環境問題を、言葉や文字だけではなく、もっとわかりやすい形に、より確かなモノに込めてお伝えしたい」「親子連れで来れる情報センターを作りたい」と言う事でした。

そして4月2日、六甲アイランドに「エコミュゼ・くらしの木」と言うスペースがオープン致しました。（六甲ライナー、アイランドセンター駅下車すぐ）

「エコミュゼ・くらしの木」は、地球の命が息づく有機野菜を始めとする、安全な食べ物の販売コーナーとエコロジカルな日用品などの展示即売コーナー、そして親子で楽しめる「自然&環境ビデオ」の鑑賞コーナー、図書コーナーなど、「モノ」を通じた新しいライフスタイルの提案スペースです。

「エコミュゼ・くらしの木」の名には、生活に根ざした環境博物館になりたいという願いも込めています。このスペースを通じて、一人でも多くの方にエコロジーに対するきっかけ作りになればと、思っています。

子供が生まれるという初めての経験で、「サステイナブルな（持続可能性の高い）社会を未来の世代に引き継いでいく」事を目的にした、日本リサイクル運動市民の会の活動を身